FREE
無料

戦国大名・毛利氏発祥の地

厚木人

Atsugi Jin

Powered by 歴史人

Vol.01

有力戦国大名発祥の地
鎌倉時代の毛利氏と厚木

厚木は歴史の分岐点
戦国・幕末の重要な舞台だった

古代ロマンを発掘
縄文・弥生・古墳時代の歴史遺産

はじまりの物語、厚木で発見！

あつぎの歴史

（原始・古代～現代 概略）

原始・古代

時代	年代	できごと
旧石器	約2万年前	厚木市域に人が住み始める
縄文	約1万3000年前～2400年前	**縄文土器が作られる**
弥生	約2400年前～3世紀	稲作が始まる
古墳	4世紀後半～7世紀	厚木市域に古墳が造られる
奈良	和銅6年（713）	一帯が相模国愛甲郡となる（『延喜式』より）
平安	承平5年（935）	愛甲郡を6郷（玉川・英那・印山・船田・六座・餘部）に分ける（『倭名類聚抄』より）

厚木の文化の幕開け ▶P.14～

中世

鎌倉	建久5年（1194）	源頼朝が日向薬師を参詣。下毛利荘、大江広元が駄餉（弁当）を振る舞う（『吾妻鏡』より）
	建仁2年（1202）	**大江広元の4男・季光誕生。のちに毛利荘を相続して毛利氏を名乗る**
	建暦3年（1213）	和田義盛の乱。愛甲季隆、毛利景行らが討ち死に
	文永8年（1271）	日蓮が佐渡配流の途中に本間重連の館に滞在。星下りの奇瑞に遭遇
南北朝	延元3年・建武5年（1338）	夢窓疎石が高師直に宛てた書状に「相州厚木郷」の名称が見える
室町	長享2年（1488）	**扇谷上杉定正、山内上杉顕定を実蒔原の戦いで破る**
戦国	永禄4年（1561）	長尾景虎が小田原攻めで通過。建徳寺や最勝寺が大破
	永禄12年（1569）	武田信玄が小田原攻めで通過。千光寺や遍照院が大破
	天正13年（1585）	北条氏直が荻野の市法度を定める
	天正18年（1590）	豊臣秀吉が厚木などに禁制を下す
	天正19年（1591）	徳川家康が市内寺社に朱印地を与える

厚木で毛利氏が誕生! ▶P.4～

関東・戦乱の時代へ ▶P.10～

近世

江戸	享保14年（1729）	このころ烏山藩厚木役所が設置される
	天明3年（1783）	荻野山中藩第5代藩主・大久保教翅、中荻野に陣屋を設置
	天保2年（1831）	渡辺崋山が厚木を訪れ「厚木六勝図」を描く
	慶応3年（1867）	**荻野山中陣屋が浪士隊に焼き討ちされる**

日本は戊辰戦争へ突入 ▶P.12～

福伝寺山門（▶P.13）

近現代

明治	明治4年（1871）	廃藩置県。荻野山中県、烏山県、小田原県、六浦県に属する ※11月に足柄県、明治9年（1876）4月に神奈川県となる。
	明治11年（1878）	厚木村に愛甲郡役所を設置
	明治22年（1889）	市制・町村制施行。市域36か村が厚木町ほか12か村になる
	昭和2年（1927）	小田原急行鉄道開通。相模厚木駅（現本厚木駅）開業
昭和	昭和30年（1955）	**厚木町、南毛利村、睦合村、小鮎村、玉川村が合併し、厚木市が発足** ※その後相川村、依知村、荻野村を編入。
	昭和39年（1964）	相模大橋開通
	昭和43年（1968）	国道246号、東京―沼津線開通
平成	平成31年（2019）	東名高速道路、東京―厚木間開通
令和	令和7年（2025）	あつぎ郷土博物館開館
		市制施行70周年

厚木市制スタート

あつぎ郷土博物館（▶P.20）

厚木人目次

4 はじまりの物語、厚木で発見！
① 有力戦国大名発祥の地 鎌倉時代の毛利氏と厚木
② 厚木は歴史の分岐点 戦国・幕末の重要な舞台だった
③ 古代ロマンを発掘 縄文・弥生・古墳時代の歴史遺産

18 厚木市歴史発見MAP ●厚木市内の文化財

20 あつぎの歴史をもっと知るならココへ！

厚木市について

市制70周年

神奈川県厚木市は、令和7年2月1日に市制70周年を迎えた。本冊子は厚木市の歴史をテーマごとにまとめ、再発見する目的で制作した。

地理

神奈川県のほぼ中央に位置する厚木市は、面積93.83平方キロメートル、人口22万3028人の都市（令和7年8月現在）。一級河川の相模川と丹沢大山に挟まれ、扇を広げたような地形が特徴。

歴史

相模平野の肥沃な地域にあったことから、縄文時代早期には人々が定住したと推定されている。古墳も数多く造られやがて、鎌倉時代には毛利氏をはじめとした武将や寺院の所領地にもなった。江戸時代は徳川の直轄領のほか、大名領・旗本領が配され、宿場、産業、交易の場として大いに繁栄し、小江戸とも呼ばれた。

観光・特産品

東京都心や羽田空港、横浜からアクセスしやすく、本厚木駅は1日平均13万人の乗降がある。豊かな自然環境で育まれる特産品も多く、鮎料理やいのしし鍋、とん漬、豚ホルモン、地酒などは全国的に有名。

企画制作／歴史人編集部　朝日放送テレビ株式会社　協力／厚木市
編集／深谷美和　地図／アトリエ・プラン　デザイン／近藤琢斗（FROG KING STUDIO）
営業／筒井達也・三森文子　校正／東京出版サービスセンター　編集人／後藤隆之
発行日／2025年11月1日　発行人／園部 充
発行所／株式会社ABCアーク©朝日放送テレビ・ABC ARC

本誌掲載記事・写真・イラストなどの無断複写（コピー）・複製・転載を禁止します。

写真協力／厚木市・（一社）厚木市観光協会
表紙画像／紙本著色毛利元就像（毛利博物館蔵）・大江広元像（毛利博物館蔵）・
東鑑（あつぎ郷土博物館蔵）・林王子遺跡出土 有孔鍔付土器・登山1号墳出土 家形埴輪

はじまりの物語、厚木で発見！

1 有力戦国大名 発祥の地

鎌倉時代の毛利氏と厚木

厚木市は、戦国大名・毛利氏のルーツの地。鎌倉幕府政所の初代別当を務めた大江広元と子息、特に四男・季光（毛利氏初代）の姿を追う。 監修・文／小和田泰経

紙本著色毛利元就像
安芸毛利氏の第12代当主。安芸国の国人領主から一代で中国地方統一を成し遂げた。
毛利博物館蔵

大江広元像
幕末の絵師・大庭学僊筆。毛利博物館蔵

【毛利氏の移動ルート】
「毛利」の姓を初めて名乗ったのが、大江広元の4男・季光。時代とともに一族が西国に移動しても、同じ姓を名乗ることになる。

第一章 有力戦国大名 毛利氏の故地・厚木

毛利氏というのは名字（苗字）であり、その本姓は大江氏という。本姓とは、古代以来の同族集団が用いた本来の氏を指す。源氏・平氏・藤原氏・橘氏の「四姓」が俗に「源平藤橘」と称されるほか、大江氏や菅原氏なども氏であった。古代には、同族集団は同じ氏を用いていたが、中世になると、同族集団のなかの家それぞれが、多くは本拠とする土地の名前を家名として称するようになった。これが名字である。つまり、同じ氏に属する集団であっても、各家が別な名字を持つようになったということになる。

毛利氏の本姓である大江氏は、古代の名族である土師氏の流れをくむという。一説には平城天皇の皇子阿保親王の子孫ともいわれるが、確かなことはわからない。ちなみに、毛利氏の家紋「一文字に三つ星」は、阿保親王が一品を追贈された故事によるものと伝わっている。

その土師氏であるが、朝廷から大枝姓を賜わると、平安時代前期に大江音人が大江姓へと表記を改めた。

【毛利氏の歩み】

時代	年代	できごと
鎌倉	久安4年（1148）ごろ	大江広元誕生
	元暦元年（1184）	広元、公文所の別当に就任
	建仁2年（1202）	広元四男・季光誕生。のちに毛利荘を相続①
	承久3年（1221）	季光、承久の乱で功績をあげる。安芸国吉田荘（現広島県安芸高田市）を与えられる。
	宝治元年（1247）	宝治合戦。三浦方に参じた季光は自害
		季光四男経光、佐橋荘（現新潟県柏崎市）で毛利家を継ぐ②
南北朝	建武3年（1336）	経光四男時親、吉田荘へ移る③
	明応6年（1497）	弘元次男として元就誕生
室町	大永3年（1523）	元就が家督を継ぐ。
	天正19年（1591）	元就孫の輝元、居城を広島に移す④
江戸	慶長9年（1604）	輝元、萩城に移る⑤
	文久3年（1863）	敬親、萩城を去り山口へ移る⑥
大正	大正5年（1916）	防府多々良邸（旧毛利家本邸）完成⑦

大江広元肖像 鎌倉幕府の中心人物らを描いた錦絵。北条時政、北条政子（政子御前）、北条義時（江間小四郎）、大江広元（左中央）、源実朝、源義経（九郎義経）が描かれている。『かるたあわせ鎌蔵武勇六家仙』国立国会図書館デジタルコレクションより https://dl.ndl.go.jp/pid/1310283（参照 2025-04-16）

なお、大江音人は学者としても知られ、以来、菅原道真を輩出した菅原氏と並び、大江氏は学者の家として知られるようになっている。そのようなことから、菅原氏を菅家と呼ぶのに対し、大江氏は江家と呼ばれた。

平安時代末期の大江広元は、母親の再婚相手であった中原広季の養子となったことがあるという（諸説あり）。そのため、中原広季の子（養子とも）親能が源頼朝に接近すると、広元も頼朝に学識を買われて近侍するようになり、京から鎌倉に下向したのだった。その後は、治承・寿永の乱、すなわち源平の争乱を通じて頼朝を支え、守護・地頭の設置も、広元の献策であったとされる。鎌倉幕府の成立後は、政務を担う政所の別当となり、朝廷との折衝に活躍した。そうした功績が認められ、広元には日本各地に地頭職が与えられた。こうした地頭職は、広元から子へと、それぞれ相伝されている。

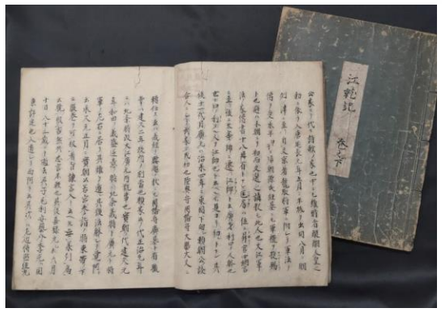
長男の親広は、出羽国寒河江荘（山形県寒河江市）の地頭職を継承した。ただし、親広自身は承久3年（1221）の承久の乱で後鳥羽上皇方に与したことで没落してしまう。その子孫は寒河江城を拠点に寒河江氏を称したが、戦国時代には、最上氏によって滅ぼされている。

次男の時広は、出羽国長井荘（山形県長井市・米沢市）の地頭職を継承し、長井氏を称した。子孫は大江氏の惣領として鎌倉幕府に重きをなしたが、南北朝時代に、伊達氏によって早くも滅ぼされている。

三男の政広（宗元）は、上野国那波荘（群馬県伊勢崎市）の地頭職を継承し、藤原氏の流れをくむ那波氏の養子となったという。この那波氏は、戦国時代になると北条氏と上杉氏との対立に巻き込まれ、滅亡してしまっている。

四男の季光は、相模国毛利荘（神奈川県厚木市・愛甲郡愛川町・清川村）の地頭職を継承した。そして、この毛利荘を本拠として毛利氏を称するようになっている。

戦国時代に安芸国の戦国大名となった毛利元就は、この毛利季光の子孫である。そういう意味からすると、厚木市は戦国大名毛利氏の発祥の地だったということになる。



江就記 江戸時代の軍記物で、毛利元就の一代記。大江広元や毛利季光から元就に至るまでの歴史も記されている。あつぎ郷土博物館蔵

第一章 鎌倉時代の毛利荘と毛利氏

毛利荘の範囲については、厳密に画定することは難しい。おおむね、相模川の西岸に位置し、南端は厚木市の中心部、北端は愛甲郡愛川町、西端は愛甲郡清川村に至る広大な荘園だったとみられている。荘域はさらに、北半の上毛利荘と南半の下毛利荘に区分されていた。

毛利荘の成立時期は不明であるが、平安時代末期には、毛利景行の支配下にあった。この毛利氏は、大江姓の毛利氏ではなく、藤原姓の毛利氏で、居館は愛甲郡清川村の煤ヶ谷に存在していたとされる。

治承4年（1180）から治承・寿永の乱、いわゆる源平の合戦が始まったとき、毛利景行は、大庭景親に従って平家方についた。争乱が源頼朝の勝利に終わると、毛利景行は頼朝に降伏している。こののち、頼朝の側近・大江広元に毛利荘の地頭職が与えられたらしい。毛利荘は、鎌倉にも近い枢要な地で、頼朝は鎌倉の防備にも役立てようとしたのだろう。

大江広元が毛利荘を源頼朝から与えられた時期については、よくわかっていない。建久5年（1194）、頼朝が日向薬師（ひなたやくし）（伊勢原市）として知られる霊山寺（りょうせんじ）（現在の宝城坊）に参詣した際、広元は下毛利荘において頼朝一行に駄餉（弁当）を献上しており、このときにはすでに広元が支配していたことがわかる。これは、頼朝が木曾義仲の長男義高を誅殺したことにより、その許嫁であった長女大姫が病床に伏せってしまったことから、平癒を祈願するため参詣したものだった。当時の広元は鎌倉に居館を持っていたが、毛利荘にも屋敷を用意していたのかどうかは不明である。

頼朝の死後、広元は2代執権の北条義時を支え、建暦3年（1213）に和田義盛が義時に反旗を翻した際にも、義時方についた。このとき、毛利景行は和田義盛に味方して滅ぼされており、以後、毛利荘は広元が一円的に支配するようになる。

承久3年（1221）に後鳥羽上皇が北条義時追討を標榜して承久の乱を起こすと、広元は義時を支え、広元の四男季光も西上する幕府軍に従軍している。季光は、木曽川や宇治川・淀川の強行渡河で活躍し、これにより、恩賞として安芸国吉田荘（広島県安芸高田市）の地頭職を与えられたようである。

元仁元年（1224）に北条義時が没すると、翌年には広元も没した。これにより、四男の季光が毛利荘や越後国佐橋荘（さばしのしょう）（新潟県柏崎市）を継承し、毛利荘を本拠とするようになったらしい。

季光は、北条義時の跡を継いだ3代執権泰時に重用され、評定衆にも抜擢された。それだけでなく、娘を泰時の孫にあたる時頼に嫁がせ、北条氏と姻戚にもなっている。順当にいけば、毛利氏は執権北条氏の外戚として安泰だったにちがいない。

しかし、宝治元年（1247）の宝治合戦で三浦泰村が執権となったばかりの時頼に対して兵を挙げると、季光は苦渋の決断を迫られた。季光の妻が、三浦泰村の妹だったためである。悩んだ末に季光は、妻の説得を受けて三浦泰村に味方することにしたという。

結局、この宝治合戦で三浦一族は敗北し、季光も子らとともに自害した。毛利荘は、こののち安達氏の所領となり、安達氏が弘安8年（1285）の弘安合戦（霜月騒動）で滅亡してからは、北条氏や鎌倉幕府と関係が深い寺社の所領になったとみられる。

なお、季光の四男とされる経光は、当時越後国佐橋荘にいたため宝治合戦には参加していなかった。このころ大江氏の嫡流を継いでいた季光の兄時広の嫡男にあたる長井泰秀の働きかけもあり、経光には越後国佐橋荘と安芸国吉田荘の相続が認められている。

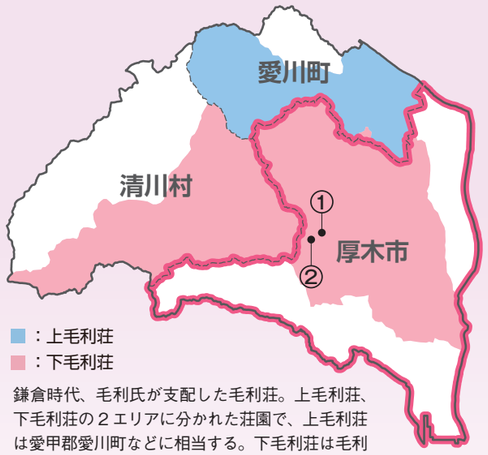
文永7年（1270）になって経光は、所領を長男基親と四男時親に分割譲渡した。このとき、吉田荘の地頭職を継承した時親が建武3年（1336）、吉田荘へと下向し、安芸毛利氏の祖となったのである。

監修・文／小和田泰経

【毛利荘ゆかりの地】

毛利荘推定図

厚木市を中心とした広大な荘園



■：上毛利荘
■：下毛利荘

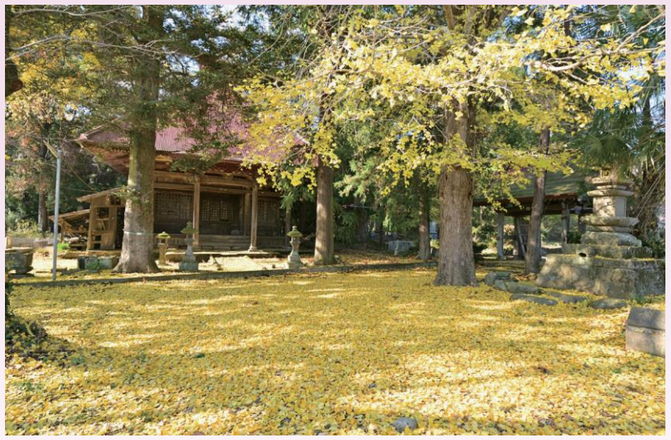
鎌倉時代、毛利氏が支配した毛利荘。上毛利荘、下毛利荘の２エリアに分かれた荘園で、上毛利荘は愛甲郡愛川町などに相当する。下毛利荘は毛利季光ゆかりの地・飯山や荻野エリアなどを含む。

安達盛長の墓を参拝

❶ 金剛寺

弘法大師が開き、平安時代後期作の木造阿弥陀如来坐像（国重文）などの文化財を所蔵する寺院。大師堂脇の宝篋印塔・五輪塔は盛長の墓と伝わり、寺には位牌も安置されている。

住 厚木市飯山 5456　営 参拝自由　交 バス停飯山観音前から徒歩約３分



頼朝が造営させたという観音堂

❷ 飯山観音長谷寺（ちょうこくじ）

神亀２年（725）に行基が創建した寺院で、観音堂の十一面観世音菩薩には行基手彫りの胎内仏が納められているという。仁王門周辺のアジサイや、厚木市天然記念物のイヌマキも有名。

住 厚木市飯山 5605　営 9:00 ～ 16:00　無休　参拝自由
交 バス停飯山観音前から徒歩 10 分

あわせて行きたい

白山展望台（はくさん）

飯山観音長谷寺から徒歩 25 分、白山山頂にある展望台。天気がよければ東京方面も見える。 MAP P.18

飯山白山森林公園

白山とその周辺の里山に広がる公園。約 600 メートルの大門通りは、厚木の代表的な桜の名所。 MAP P.18

毛利敬親具足祝図

毛利敬親と重臣が正月に「具足祝」をする様子を描いた図。山口県出身の日本画家・兼重暗香が明治時代に描いたもの。

毛利博物館蔵

厚木で見られる機会あり

【毛利氏ゆかりの名品】

厚木をルーツとする毛利氏の歴史・文化に触れられる名品。

※ページ内掲載の資料は、令和８年１月24日～３月１日、あつぎ郷土博物館で開催の市制 70 周年記念展示「寿 ―毛利家と共に―」で展示予定（→P.20）。

東鑑（吾妻鏡）

鎌倉幕府が編纂した公式の歴史書。大江広元が源頼朝に駄餉（弁当）を振る舞った話や、毛利季光のエピソードなども記録されている。

あつぎ郷土博物館蔵

軍幟

毛利元就と戦場に出た軍旗。毛利家の家紋・一字三星紋と軍神の名前が記されている。

毛利博物館蔵

高祖御一代略図　九月十三夜依智星降 歌川国芳　星下りの奇瑞と呼ばれる伝説を描いた作品。厚木市内には伝説の舞台とされる３寺院がある。
あつぎ郷土博物館蔵

日蓮・星下り伝説がある厚木市内の3寺院

妙純寺

文永 11 年（1274）、本間重連を施主として創建。境内には本間重連の墓所や荘厳な祖師堂、星下りの奇瑞ゆかりと伝わる星井戸がある。

住 厚木市金田 295
営 参拝自由
交 バス停金田から徒歩３分

蓮生寺

日蓮を開山、本間重連を開基とし、日蓮の直弟子の日源を中興開山とする。日蓮は自ら石を積んで両親供養の宝塔を造ったという。

住 厚木市中依知 679
営 参拝自由
交 バス停蓮生寺から徒歩３分

妙傳寺

日蓮が本間重連から寺地として屋敷を献上されたのが起源。釈迦堂の木造釈迦如来立像は一丈六尺（534cm）で、市指定有形文化財。

住 厚木市上依知 2397
交 バス停上依知から徒歩６分

第二章 鎌倉時代の厚木ゆかりの人物

安達盛長は鎌倉時代初期の武将であり、源頼朝に早くから近侍し、活動していた事で知られる。厚木市にはこの盛長ゆかりの史跡が残っている。例えば飯山の金剛寺には盛長のものと伝わる石塔（墓）が残され、三田十軒村の石塔群には、盛長の墓とされるものがある。また厚木市三田の三田八幡神社は、盛長が鶴岡八幡宮を勧請し再建したとの伝承を持つ。

前述したように盛長は頼朝に仕えた訳だが、どのような活動をしていたのか。その一つに頼朝の平家方への挙兵に際しての活動がある。治承4年（1180）6月、頼朝は平家方への挙兵を計画していたが、その際、味方を募るため、盛長を「累代の御家人」のもとに遣わしている（『吾妻鏡』治承四年六月二十四日条）。盛長は頼朝の書状を持って、小中太光家と共に同志獲得に出掛けたのであった。この事から盛長が頼朝から大いに信頼されていたことが分かろう。盛長は相模国の武士に加勢するよう呼びかけているが、波多野義常と山内首藤経俊はその命令に従わず、悪口を吐くこともあったという（『吾妻鏡』治承四年七月十日条）。

江戸時代に編纂された地誌『新編相模国風土記稿』には、治承年間に盛長が飯山の金剛寺に来たりて「霊地」であることを感じ、没後に遺骨を送り葬送されたとか、盛長は建久年間に三田村の領主であったとする伝承が記述されている。これらは盛長の相模国遊説にまつわるものであろう。

弓の名手 愛甲三郎

武者姿のあゆコロちゃん

厚木市マスコットキャラクターのあゆコロちゃん。今も地元で親しまれる武将・愛甲三郎にちなみ、鎧武者姿で弓を引くデザインもある。©厚木市

愛甲三郎季隆は、鎌倉時代前期の武将であり相模国（神奈川県）愛甲郡愛甲荘を本拠としていた。現在の厚木市愛甲には愛甲氏の居館があったとして道標が設置されている。

季隆が初めて史料に登場するのが『吾妻鏡』（鎌倉時代後期に編纂された鎌倉幕府の史書）の治承４年（1180）十二月二十日条と言われている。この日、鎌倉における源頼朝の新居完成を祝し儀式が催行されたが、同時に「御弓始」（弓場を新設した時などに初めて弓射を試みる武家の儀式）も行われた。そこに射手として登場するのが弓の名手として知られる「愛甲三郎季隆」である。これ以前の季隆の動向は不明であるが、早くから頼朝に属し、愛甲荘の領主としての支配権を安堵され、御家人に組み込まれていたと推測されている。

季隆の御家人としての奉仕の特徴は射芸であり、例えば寿永元年（1182）６月７日にも季隆は頼朝に召されて乗馬用の深沓に五矢を全て命中させている（『吾妻鏡』）。

季隆の弓術は実戦においても発揮され、武蔵国の有力御家人・畠山重忠追討（元久２年・1205年６月）の際には重忠に矢を命中させその首級を得て、北条義時に献上した。勇猛な季隆であったが、建暦３年（1213）５月の和田合戦においては北条氏ではなく和田義盛に加勢し、一族と共に討死している。

愛甲三郎

頼朝公富士之御狩図（部分）

『曽我物語』ゆかりの錦絵で、源頼朝が建久４年（1193）５月16～28日に行った巻狩りの様子を描いたもの。絵の左下で弓を持ち、腰に笠を構えたのが愛甲三郎。
あつぎ郷土博物館蔵

戦国大名大友宗麟の祖先・近藤氏も厚木と縁が深い。近藤能成は平安時代後期の武将であり、相模国（神奈川県）愛甲郡古庄郷司であったと考えられている。一説によると、平将門追討に功あった藤原秀郷の子孫である。能成の事績については不明な点が多いが、その妻は波多野（大友）四郎経家（相模国足柄上郡大友郷の武士）の娘であり、その娘との間に大友能直が生まれている。この能直こそ、戦国時代のキリシタン大名として有名な大友宗麟の祖先であり、大友氏の初代当主である。

さて能成について関連史料は極めて少なく『吾妻鏡』の養和２年（1182）五月二十五日条が知られている程度だ。それによると能成は金剛寺（厚木市飯山）の僧侶からその「非法」を訴えられている。金剛寺の僧侶らは「鎌倉殿」（源頼朝）に書状を捧げ、能成の非法を訴え、裁定を乞うたのであった。金剛寺の訴えによると、能成は狩山（山で鳥獣を狩ること）や養蚕のために僧侶を召し使ったようだ（狩山のために僧侶を追い出すこともあった）。更には寺に「公事」（税）をかけたのである。こうした事は頼朝の耳に達し「見苦しき事」とされた（『吾妻鏡』養和二年五月二十六日条）。

そして速やかに能成の非法を停止するようにとの命令が発せられたのである。つまり、能成側が非とされたのであった。

また、日蓮は鎌倉時代の僧侶であり、日蓮宗の開祖として著名である。日蓮は布教や辻説法などにより他宗派を攻撃したことでも知られるが、それに伴い鎌倉幕府は日蓮を捕え佐渡に配流とした（文永8年・1271）。

佐渡への途上で日蓮が立ち寄ったのが、愛甲郡依智郷を領地としていた本間重連の屋敷である。同年9月13日の夜、日蓮は重連屋敷の庭上に立ち、経文を誦えて、月に向かって文句を言ったところ、そこに明星天子（帝釈天の従者。太陽に先立ち世界を照らし闇を破ることを仕事とする）と星々が下る。庭上の梅枝にそれらは懸かって光を放つと、童子に変じて日蓮の眼前に立つ。そして「我は明星なり」と語り出し、日蓮と対話したのであった。明星天子は日蓮の守護を約するのである。これがいわゆる「星下りの奇瑞」と呼ばれる伝説である（P. 8図）。

この奇瑞に感じて日蓮に帰依した重連が梅樹の傍らに寺を開創したというが、厚木市内にそうした寺が三つ残されている。妙純寺、妙傳寺、蓮生寺である。どの寺院が真の「星下り」にまつわる寺かは昔から争論があったようだが、江戸時代に編纂された地誌『新編相模国風土記稿』は何れも証拠はないと記述している。

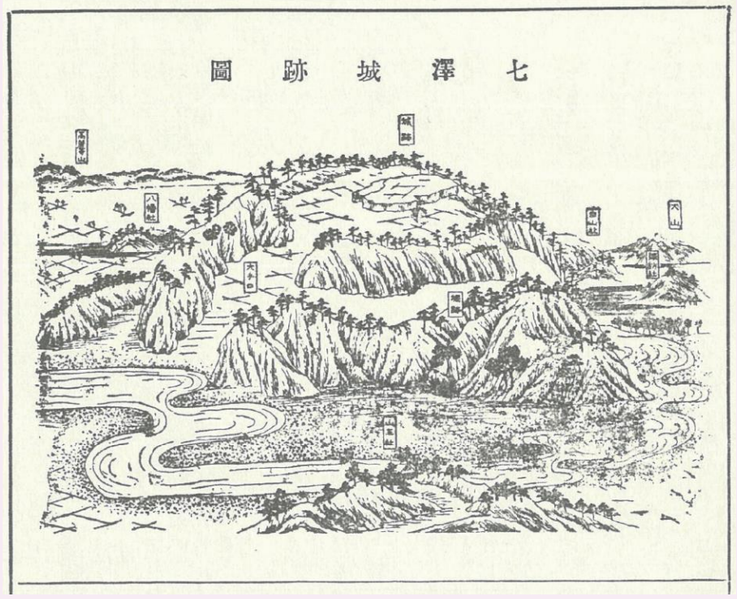
2 はじまりの物語、厚木で発見！

厚木は歴史の分岐点

戦国・幕末の重要な舞台だった

享徳の乱・長享の乱は、関東における戦国時代の始まりとも考えられる。また、幕末に荻野山中藩が巻き込まれた騒乱も戦乱の序章だった。

監修・文／小和田泰経



七沢城

『新編相模国風土記稿』より　享徳の乱のころに扇谷上杉氏の拠点として築かれた要害。山の地形を生かした堅牢な山城だったと推測される。

【享徳の乱】

関東管領・室町幕府方			鎌倉公方方
山内上杉氏 扇谷上杉氏 太田道灌 今川範忠 足利政知	⚔ 宝徳2年(1450) 江の島の戦い	山内上杉氏の憲忠が足利成氏の御所を襲撃。その後江の島で山内上杉氏・扇谷上杉氏×足利成氏の戦が勃発　このころ扇谷上杉氏の拠点として七沢城が築かれる	足利成氏 宇都宮氏 結城氏 など
	⚔ 享徳3年(1454) 享徳の乱	足利成氏が上杉憲忠を暗殺	
	享徳4年(1455)	幕府方の今川勢が鎌倉公方の鎌倉を制圧。足利成氏が鎌倉から古河に拠点を移す（古河公方）	
	長禄2年(1458)	幕府方の足利政知が堀越に拠点を置く（堀越公方）	
	文明14年(1482)	享徳の乱が終結	

【長享の乱勢力図】

山内上杉氏　上杉顕定　VS　扇谷上杉氏　上杉定正　上杉朝昌（七沢城）

同盟：越後守護上杉房定　太田資康

同盟：古河公方 足利成氏　長尾景春

現在の七沢城跡周辺

七沢城の中心は、現在 AOI 七沢リハビリテーション病院があるあたり。

住 厚木市七沢 1304　営 見学自由
交 バス停七沢城跡から徒歩 8 分

第一章 享徳・長享の乱と七沢城の戦い

室町時代に幕府は、将軍足利氏の庶流を鎌倉公方（関東地方の支配拠点である鎌倉府の長）、その補佐役として上杉氏を関東管領としていた。ちなみに上杉氏は、上野国と武蔵国の北部および伊豆国を支配下におく山内上杉氏が関東管領を相伝し、その一族扇谷上杉氏が武蔵国の南部から相模国を支配下においていた。

永享10年（1438）の永享の乱で4代鎌倉公方足利持氏が、幕府方についた関東管領上杉憲実によって滅ぼされると、5代鎌倉公方となった持氏の子成氏は、新たな関東管領となった憲実の子憲忠を追い詰めていく。そうしたなか、宝徳2年（1450）には上杉憲忠が足利成氏の御所を襲撃し、江の島に逃れた鎌倉公方方と戦った。

扇谷上杉氏が、相模国に七沢城（厚木市七沢）を築いたのも、この頃のこととみられている。

江の島合戦後、幕府の仲介により足利成氏と上杉憲忠は和睦したものの、享徳3年（1454）、成氏が憲忠を暗殺してしまう。これに対し、憲忠の弟房顕が幕府から成氏追討の総大将に任ぜられたことで、関東は鎌倉公方足利氏に従う勢力と、関東管領上杉氏に従う勢力が戦いを繰り広げることとなった。この争乱を享徳の乱といい、以来、30年近くも続くことになる。

享徳の乱が文明14年（1482）に終結すると、幕府方として足利成氏を圧倒した上杉氏の勢威は強まった。しかし、今度は、山内上杉氏の上杉顕定と扇谷上杉氏の上杉定正が一族を巻き込んで権力争いをするようになり、長享元年（1487）冬には、長享の乱が勃発している。

翌長享2年（1488）2月、上杉顕定は実父にあたる越後守護上杉房定の支援を得ると、1000余の兵を率いて武蔵国の鉢形城（埼玉県寄居町）を出陣し、扇谷上杉氏の本領である相模国へと侵攻していった。このとき、七沢城を拠点に相模国の中心を守っていたのが上杉定正の弟朝昌である。七沢城は、現在のAOI七沢リハビリテーション病院（厚木市七沢）を中心に築かれていたようで、かなりの規模があったらしい。西方の標高375mの山頂には見城台と呼ばれる出城もある。

七沢城の防御はかなり堅固であったとみられるが、上杉朝昌は城から打って出たようである。しかしながら扇谷上杉方は山内上杉方に敗れ、七沢城は攻略されてしまう。

200余の援軍を率いる上杉定正の援軍が河越城（埼玉県川越市）を出陣し、昼夜兼行で到着したのは、七沢城陥落直後のことだった。戦闘の経緯については不明な点が多いものの、上杉定正が上杉顕定を近隣の実蒔原で破っている。

こののち両上杉氏は、20年近くにわたって長享の乱を戦い、その間に小田原城の北条氏が勢力を拡大してきたこともあり、永正2年（1505）に和睦した。もし、実蒔原の戦いで上杉定正が敗北していれば、もう少し早い段階で長享の乱は山内上杉氏の勝利で終わっていたかもしれない。

実蒔原の戦い後、扇谷上杉氏は相模国の拠点を七沢城から大庭城（藤沢市）へと移した。そして、扇谷上杉氏が北条氏に領国を奪われるなか、七沢城は廃城になったとみられる。

厚木市内 上杉定正ゆかりの地

観音寺　七沢にある天台宗の寺院で、本尊は馬頭観世音菩薩。上杉定正の愛馬「月影」が供養されたという。

住 厚木市七沢 2741　営 10:00 ～ 17:00（祈祷受付）
交 バス停七沢温泉入口から徒歩 20 分

鐘ヶ嶽

七沢城跡近くの鐘ヶ嶽。山中に上杉定正の妻のものとされる石碑が残されている。

住 厚木市七沢（鐘ヶ嶽）
営 見学自由
交 バス停広沢寺温泉入口から徒歩 1 時間 10 分

広沢寺

七沢にある広沢寺は、扇谷上杉氏の上杉定正ゆかりの地。定正が中興開基と伝わる。

住 厚木市七沢 2613
営 参拝自由
交 厚木 IC から 30 分

激動の南北朝時代！高師冬と飯山

あつぎ郷土博物館　学芸員　飯田 好人

室町幕府で勢力を伸ばす高師直・師冬親子

高師冬は、鎌倉御家人足利氏の家臣、高氏の庶流に生まれた人物で、生年は不明。室町幕府初代将軍、足利尊氏の執事（後の管領）高師直の養子となり、幕府の成立に尽力した。高氏の本来の役割は足利氏の所領管理にあったが、鎌倉幕府の滅亡後に起きた南北朝動乱の中で師直を筆頭に軍事面でも才覚を発揮した。師冬は関東を主戦場として、東国の南朝勢力と戦い、関東の平定に功績を挙げた。

「両将軍」と呼ばれるほど尊氏・直義兄弟の関係は良好で、幕府政治はその関係を基に運営されていたが、配下武将の利害関係から師直と直義が対立、次第に尊氏・師直対直義の構図に変化し、観応の擾乱と呼ばれる幕府を二分する内乱となった。

京都で師直と直義の対立が続く中、尊氏の四男・基氏が僅か 9 歳で鎌倉公方として関東へ下ると、師冬は上杉憲顕とともに基氏を補佐する関東執事（後の関東管領）に任命された。京都での対立は関東へも伝わり、師冬と憲顕が激しく対立するようになる。

湯山事件で飯山に立て籠もった高師冬

観応元年（1350）11 月、上杉左衛門蔵人が挙兵、憲顕はこれを討伐すると称して鎌倉を離れ、自らが守護する上野国（現・群馬県）へ向かい、そこで兵を集めた。憲顕らの行動に危機感を抱いた師冬は、同年 12 月 25 日（1351 年 1 月 23 日）に基氏とともに鎌倉を脱出、その翌日に相模国毛利荘内湯山（現・厚木市飯山）に着いた。同月 27 日の朝、憲顕らの軍勢は師冬が籠る「飯山寺」（金剛寺）を攻め、基氏を奪還した。湯山事件と呼ばれる合戦に敗れた師冬は、甲斐国須沢城（現・山梨県南アルプス市）へと逃れたものの、観応 2 年 1 月 17 日（1351 年 2 月 13 日）、憲顕らに城を攻められ自害した。

師冬の死後、劣勢となった尊氏は直義と和睦する。事実上の降伏に近く、師直はこの際に直義配下の武将らに惨殺された。和睦成立後、水面下で両派の対立は続き、半年を経ずに尊氏兄弟は再び対立した。再燃した観応の擾乱は、直義の死により一応の決着を迎える。直義が鎌倉で急逝した観応 3 年 2 月 26 日（1352 年 3 月 12 日）は、奇しくも政敵・師直の一周忌だった。

湯山事件の舞台・飯山寺にあたるとされる金剛寺（→ P.7）。

皇国一新見聞誌
伏見の戦争

月岡芳年，小林年参
戊辰戦争の初戦である鳥羽・伏見の戦いを描いた浮世絵。明治初期の出版。

東京都立中央図書館蔵

【戊辰戦争年表】

和暦・西暦	月日(旧暦)	できごと
慶応3年(1867)	10月15日	大政奉還勅許
	11月	薩邸浪士団による江戸での御用盗事件が頻発。薩摩藩による関東各地での攪乱計画が練られる
	11月25日～	薩邸浪士団が荻野山中陣屋を目指して出発
	12月9日	王政復古の大号令
	12月15日	荻野山中陣屋焼き討ち
	12月23日	庄内藩屯所襲撃事件
	12月25日	薩摩藩邸焼き討ち事件
慶応4年(1868)	1月3日	鳥羽・伏見の戦い
	1月6日	徳川慶喜・大坂を脱出して江戸へ
	4月11日	江戸城無血開城
	5月15日	上野戦争
	7月17日	江戸を東京と改称
	8月	会津戦争
明治元年(1868)	9月8日	明治改元
	9月22日	会津戦争終結
	10月22日	箱館戦争
明治2年(1869)	5月18日	箱館戦争終結

戊辰戦争

第二章 ≫ 監修・文／町田明広

荻野山中藩と薩邸浪士団 陣屋焼討事件から戊辰戦争へ

荻野山中藩とは

幕末維新期には各地で様々な大事件が起こっているが、相模国愛甲郡中荻野（厚木市）も例外ではない。その舞台は、小田原藩の支藩である荻野山中藩であり、譜代大名に属する。

宝永3年（1706）、小田原藩主大久保忠朝の次男教寛が西の丸若年寄に就任し、駿河国で5000石加増によって1万1000石の大名となる。そして、駿東郡松永（静岡県沼津市）に陣屋を設立し、松永藩が成立した。

さらに、享保3年（1718）には相模国愛甲郡・大住郡・高座郡で5000石を加増され、中荻野に出張陣屋を置いた。天明3年（1783）、5代藩主教翅の時、中荻野の陣屋を拡張改築して移り、これ以降、荻野山中藩と称した。ここが、「荻野山中陣屋焼討事件」の舞台となった。

薩摩藩と薩邸浪士団

そもそも、荻野山中陣屋焼討事件が勃発する経緯として、薩摩藩の幕府に抗する戦略があった。慶応3年（1867）8月、江戸・大坂・京都での三都挙兵計画にまい進する薩摩藩にとって、江戸での挙兵は幕府本体の上京を阻止し、かつ上方での作戦を遂行する上で、極めて重要であった。

その挙兵を側面から支援するために、関東での攪乱工作が期待された。そこで組織されたのが、江戸薩摩藩邸に集結した浪士たちからなる薩邸浪士団であった。

しかし、薩摩藩内で挙兵反対の意見が強まったことから、武力発動路線を一旦諦め、土佐藩と連携した大政奉還路線に舵を切った。10月15日に大政奉還が勅許され、当面の武力発動は延期されたため、在京要路は攪乱工作をむしろ回避すべきとの認識に至った。しかし、一度堰を切ってしまった薩邸浪士団を止めることはできなかった。

薩邸浪士団の暴発

慶応3年11月、薩邸浪士団は江戸市中を横行し、治安を守る町奉行や市中取締の庄内藩を挑発し、また、商家を襲って御用金と称して金品を強奪する御用盗事件を頻発させた。さらに、関東各地での攪乱の具体案が検討され、野州、甲州、相州に三隊を派遣した。北関東下野国出流山満願寺での挙兵、甲斐国甲府城の攻略、相模国荻野山中藩陣屋の襲撃を決定し、実行部隊の編制を行った。

11月25日、竹内啓（武蔵国入間郡竹内村医師）を隊長とする野州隊50人ほどが出流山村、上田修理（幕臣）を隊長とする甲州隊10人ほどが甲府城、12月13日には鯉淵四郎（水戸藩浪士）を隊長とする相州隊30数人が荻野山中藩陣屋を目指して、それぞれ薩摩藩邸を出発した。

荻野山中陣屋焼討事件

相州隊は隊長鯉淵の他に、出羽秋田藩出身の岩屋鬼三郎、出羽最上出身の結城四郎、相州厚木地方からは博徒の親分であり、交通労働者を取りまとめていた鈴木佐吉、後に自由党員となり自由民権運動で活躍した山川市郎らが加わっていた。

12月15日夜、40人足らずの同志で構成された相州隊は、厚木方面で行動を開始した。豪農に軍資金の提供を命じ、守りが手薄であった陣屋に鉄砲を打ち掛けた。散々脅した上で乱入し、長屋などに放火して金子を奪い、土蔵から武器・弾薬や米などを運び出し、放火して退散している。

翌日には、同志の数は人夫を入れて300人近くになった。気勢を上げて、さらに騒擾を大きくしようとした矢先に、小田原藩が出兵するとの情報が入った。そのため、鯉淵ら幹部は直ちに撤収を決めたため、戦死者1名、負傷者2名のみであった。なお、撤収段階で、人足・人夫に金銭や陣屋からの略奪品を分配して帰村させている。

その後も、各地で御用金の調達をしながら八王子に向かい、甲州街道を経由で17日深夜に薩摩藩邸に逃げ込んだ。

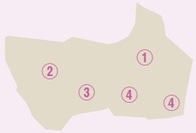
三田品川戦争、そして戊辰戦争

関東各地で攪乱工作に加わった薩邸浪士団は薩摩藩邸へ再集結し、江戸市中で殺傷・強盗事件を繰り返した。12月23日、江戸城二の丸で不審火があり、また、庄内藩屯所襲撃事件も勃発した。庄内藩は一気に硬化し、三田品川戦争の緒戦となった薩摩藩邸焼き討ち事件に繋がった。この流れが鳥羽・伏見の戦い、そして戊辰戦争に発展したが、荻野山中陣屋焼討事件はその方向性を規定した大事件の一つであった。

【山中藩陣屋之図】

下荻野村名主家に伝わる陣屋図を、昭和41年（1966）頃に日本画家・菊川京三が模写。 神奈川県立歴史博物館蔵

N



①長屋
絵図内のあちこちに見られる赤い長方形は、藩士が家族と居住する長屋。幕末の荻野山中陣屋焼討事件で７棟が焼失したという。

②役所・御殿
絵図の稲荷社の左上部分が、藩の政治の中心地だった役所。さらに奥には藩主の居住区域であった御殿も確認できる。

③稲荷社
絵図の中心付近に、陣屋稲荷と呼ばれる稲荷社が。現在も同じ場所に祀られている。

④大手門・表門
陣屋の北端は甲州道に面し、正式な入り口である大手門が置かれた。奥には石垣と表門。

福伝寺山門　荻野山中陣屋の遺構と伝わる福伝寺山門。福伝寺は曹洞宗の寺院。

住 厚木市王子 1-11-40　拝 参拝自由
交 バス停高校入口から徒歩５分

3 はじまりの物語、厚木で発見！

古代ロマンを発掘

縄文・弥生・古墳時代の歴史遺産

厚木は古くから人が住み始めた地で、縄文・弥生・古墳・各時代の遺跡が点在する。ユニークな土器などの発掘品とともに、時代別に紹介する。

監修・文 瀧音能之

弥生～古墳時代　弥生時代　縄文時代

及川伊勢宮遺跡

「甲午」銘土器
弥生時代後期～の環濠集落。写真の土器は平安時代のもの。

宮の里遺跡

家形土器
弥生時代の建物の形を知る上でも貴重な資料。

子ノ神遺跡

打製石斧
土を掘る道具と考えられる打製石斧。

土器
細やかな文様が入った土器。

ヒスイ製垂飾
穴に紐を通して使ったと思われるヒスイ製の飾り。

三田林根遺跡

発掘調査風景
大規模な拠点集落と考えられる遺跡。断続的に調査が行われている。

配石遺構
石を敷きつめた特徴的な遺構が発見された。

林王子遺跡

有孔鍔付土器
王子の団地造成にともない昭和48年（1973）の発掘調査により出土。

恩名沖原遺跡

浅鉢
魚のような神秘的な文様が特徴。平成6年（1994）～7年（1995）の発掘調査で出土した。

縄文時代

〈不思議な造形の土器〉
林王子遺跡は縄文時代中期を中心とする遺跡で、ここから出土した有孔鍔付土器の文様は実に奇妙なものである。正面中央に人体の装飾がつき、左右には蛇体の装飾がみられる。蛇は頭部が三角形であることからマムシかともいわれる。高さ26・5㎝ほどであるが、用途はわかっておらず、果実酒の醸造具であるとか、上部に皮を張って太鼓として用いたとかいわれており、儀礼などに用いられたとされる。

〈全国でも珍しい文様〉
造形的にもまれといわれるものには、恩名沖原遺跡から出たやはり縄文時代中期の浅鉢もあげられる。外面は無文であるが、内面には魚のような文様が一対、向かい合うように立体的に描かれている。こうした文様は類例がほとんどないとされ、縄文土器の造形として貴重である。この浅鉢は本来、彩色が施されていたようで、日常ではなく祭祀用の特別な浅鉢であった可能性が強いといわれる。

〈拠点集落と配石遺構〉
集落跡では、三田林根遺跡が注目される。縄文時代中期のこの遺跡は、ふつうの集落跡ではなく、拠点集落といわれる。一般の集落跡と異なり、規模が大きく、長期にわたって存続し、この地域の中心的役割を担っていたとされる。この遺跡からは、石を敷きつめた配石遺構が2か所でており、1か所からは、約800kgの巨大な礫が検出されている。また、新潟県の糸魚川産のヒスイも出土している。

縄文時代以外では、奈良・平安時代や近世の遺構もみられる。

弥生～古墳時代

〈類例が9例のみの家形土器〉
弥生時代後期の家形土器が子ノ神遺跡から出ている。切妻造で脚台がついており、高さは39㎝である。外面は赤色顔料が塗られていた痕跡がみられる。弥生時代の家の構造が立体的にみられる。全国的にも類例が少なく、蔵を表しているともいわれ、それもひとつの住居から出ていることから、共同体にとって重要な米蔵などを象徴していて、種籾の容器として使用された可能性もあるかとされている。

〈環濠で守られた大規模集落〉
弥生時代後期を中心とした大規模な環濠集落で知られるのが宮の里遺跡である。環濠とは集落の周囲にめぐらされた堀で防御施設である。この遺跡は、次の古墳時代、奈良・平安時代にも及んでおり、「甲午」銘が墨書された須恵器杯が出土している。年代は10世紀前半とされ、暦年代は承平4年（934）に相当する。このように干支年が記された土器は全国的にみても類例がなく貴重である。

〈厚木で発見された前方後円墳〉
厚木市には、旧石器時代から人々が住みついており、その後も継続的に人が居住しているが、不思議なことに前方後円墳はあまりみつかっていなかった。しかし、近年、確認がなされるようになった。そのひとつが相模川の支流での前方後円墳の発見となった及川伊勢宮遺跡であり、4基の古墳のうち、1基が前方後円墳とわかった。4世紀から5世紀にかけての築成で、全長37ｍと大きさはないが、初期の墳形を残しており、貴重な古墳である。

古墳時代

中依知遺跡群

1・2号墳
複数の円墳が見つかっている古墳群。
写真は桜樹１・２号墳。
写真提供：神奈川県教育委員会

剣・鏡（出土時）
古墳の副葬品の鉄剣は、鏡の上に乗せられた状態で出土した。

吾妻坂古墳

鏡
当時の精巧な技術が窺い知れる銅鏡。

登山1号墳 家形埴輪
人物、動物のほか家形の埴輪も出土。埴輪の出土例が少ない神奈川県で貴重な資料。

登山古墳群

登山1号墳 巫女埴輪
祭祀に関わる巫女を象った埴輪。

登山1号墳 力士埴輪
坊主頭の珍しい力士埴輪。
両足の突起にも注目。

登山1号墳 調査風景
昭和42年（1967）に行われた登山１号墳の発掘調査の様子。

古墳時代

〈坊主頭の力士埴輪が出土〉

神奈川県は埴輪の出土例が少ないといわれるなか、登山1号墳からは数々の埴輪が出土している。登山古墳は、5基の円墳からなり古墳群を形成しており、古墳時代後期の築成とされる。1号墳は開発のため調査後、消滅したが、残りの4基は現状保存され、登山古墳史跡公園として整備され公開されている。

1号墳は、径20ｍほどの円墳であるが、円筒埴輪１００個以上と形象埴輪を出土している。形象埴輪には家、人物、鶏、馬などが出ている。ほとんどのものは、一部しか残っていないが、冑をかぶった男、堅魚木を飾った家、力士埴輪は全体像がわかり、県の指定重要文化財になっている。

特に、力士埴輪は、坊主頭であり、はじめ行脚僧とされていたが、腰と股間に帯状のものがついていることから力士埴輪であることがわかった。坊主頭の力士埴輪はきわめて珍しいといえる。また、両足には5個ずつ突起がついており、これが何かは不明である。これらの埴輪はあつぎ郷土博物館でみることができる。

〈厚木市内でも古い古墳〉

下依知の吾妻坂古墳は、4世紀末から5世紀初頭の築造で、市内でも古い古墳である。この古墳の上に吾妻社があったことが『新編相模国風土記稿』にみられ、〝お吾妻様〟として祭られていた。古墳名もこのことに由来している。

古墳の形状は円墳である。規模は西側は工場で削られ、南側も道路によってかなり削られているが、本来の直径は30ｍとも50ｍともいわれる。埋葬施設は墳頂部に3基検出された。副葬品は、銅鏡、鉄製品（剣・大刀・矛）、ヒスイ製を含む玉類が出ている。特に、鏡に重ねるように鉄剣が置かれた状態で出土しており、副葬方法がユニークである。また、直径19．1cmの仿製斜縁四獣鏡も出ており、文様の構成など特異な形態であり、技術的にも精巧である。

古墳の被葬者については、この地域の有力者と思われ、大化改新の以前の地方豪族の実態を知る上で重要な古墳とされる。

〈古墳群から横穴墓群へ〉

中依知遺跡群は、縄文時代から古墳時代、奈良・平安時代を経て中世におよぶ複合遺跡である。縄文時代には、１００基以上の陥穴状土坑が確認され、早期頃からすでに狩り場として利用されていた。

古墳時代後期には、直径20ｍ前後の複数の円墳で形成される桜樹古墳群が6世紀末から7世紀前半にかけてみられる。1号墳は周溝をもっており、そこから珍しい把手付の土師器の壺がみつかっている。他に副葬品としては、鉄刀・鉄鏃といった武器類、ガラス玉、勾玉、金銅製の耳環などが出ている。

古墳の築造が終わりをつげると、7世紀中期から8世紀初頭にかけて、河岸段丘の崖面に横穴墓群がみられるようになる。これらの横穴墓の中には、入り口部分の周囲に河原石をていねいに積み上げているものもあり、中には高さが3ｍに及ぶものもある。古墳から横穴墓への移行という墓制の変化については、地元の支配者層とヤマト政権との間の力関係に変化が生じたともいわれる。

登山古墳史跡公園
現在は登山古墳群のうち２～５号墳の４基が保存され、史跡公園として公開されている。

厚木市内の文化財

【市指定有形文化財】

名称	種類	所在地	所有者
紙本著色　仏涅槃図(井上五川筆)	絵画	下川入（あつぎ郷土博物館）	養徳寺
絹本著色 釈迦三尊十八羅漢図(島崎旦良筆)	絵画	下川入（あつぎ郷土博物館）	養徳寺
絹本著色 徳川家康像(東照宮御画像)	絵画	下川入（あつぎ郷土博物館）	個人
絹本著色 弁財天十五童子像	絵画	上依知	妙傳寺
木造　薬師如来坐像	彫刻	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
木造　日光菩薩立像	彫刻	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
木造　月光菩薩立像	彫刻	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
木造　薬師如来立像	彫刻	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
木造　十二神将立像	彫刻	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
木造　釈迦如来立像	彫刻	上依知	妙傳寺
木造　毘沙門天(多聞天)立像	彫刻	上依知	妙傳寺
木造　持国天立像	彫刻	上依知	妙傳寺
木造　菩薩立像　2軀	彫刻	戸田	延命寺
木造　阿弥陀如来立像	彫刻	上落合	長徳寺
銅　鐘	工芸品	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
銅　鐘	工芸品	酒井	飯出神社
銅製品(布薩形水瓶1口)	工芸品	飯山	金剛寺
銅製品(信貴山形水瓶1口)	工芸品	飯山	金剛寺
銅製品(錫杖頭1口)	工芸品	飯山	金剛寺
銅製品(銅鋺3口)	工芸品	飯山	金剛寺
観音堂	建造物	飯山	長谷寺
薬師堂	建造物	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
厨　子	建造物	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
須弥壇	建造物	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
釈迦堂	建造物	上依知	妙傳寺
二天門	建造物	上依知	妙傳寺
石灯籠	建造物	温水	春日神社
石灯籠(康暦2年)	建造物	愛甲	熊野神社
石造物28基	建造物	金田	建徳寺
下川入諏訪神社本殿	建造物	下川入	諏訪神社
三田八幡神社本殿	建造物	三田	八幡神社
聞修寺山門	建造物	小野	聞修寺
旧岸家住宅	建造物	上荻野	市教育委員会
中世文書2葉	古文書	非公表	個人
足利義満安堵状	古文書	非公表	個人
徳川家康朱印状	古文書	下川入（あつぎ郷土博物館）	八幡神社
土師器	考古資料	下川入（あつぎ郷土博物館）	市
子ノ神遺跡出土家形土器	考古資料	下川入（あつぎ郷土博物館）	市
林王子遺跡出土有孔鍔付土器	考古資料	下川入（あつぎ郷土博物館）	市
恩名沖原遺跡出土浅鉢	考古資料	下川入（あつぎ郷土博物館）	市
宮の里遺跡出土土器	考古資料	下川入（あつぎ郷土博物館）	市
愛名宮地遺跡出土瓦塔	考古資料	下川入（あつぎ郷土博物館）	市
北条家制札	歴史資料	下川入（あつぎ郷土博物館）	個人

【国指定重要文化財】

名称	種類	所在地	所有者
木造　阿弥陀如来坐像	彫刻	飯山	金剛寺

【県指定重要文化財】

名称	種類	所在地	所有者
木造　地蔵菩薩坐像	彫刻	飯山	金剛寺
木造　不動明王立像	彫刻	酒井	法雲寺
鰐　口	工芸品	下古沢	本照寺
銅　鐘	工芸品	飯山	長谷寺
銅　鐘	工芸品	中依知	浅間神社
本　堂	建造物	飯山	本禅寺
荻野神社本殿・拝殿	建造物	上荻野	荻野神社
厚木市登山1号墳出土埴輪	考古資料	下川入（あつぎ郷土博物館）	市

【国指定重要無形民俗文化財】

名称	種類	所在地	所有者
相模人形芝居　林座	民俗芸能		相模人形芝居林座
相模人形芝居　長谷座	民俗芸能		相模人形芝居長谷座

【県指定無形民俗文化財】

名称	種類	所在地	所有者
相模のささら踊り	民俗芸能		長谷ささら踊り盆唄保存会
相模のささら踊り	民俗芸能		愛甲ささら踊り盆唄保存会

【市指定無形民俗文化財】

名称	種類	所在地	所有者
伊勢十二座大神楽獅子舞	民俗芸能		伊勢十二座大神楽獅子舞保存会
古式消防(木遣唄・まとい振り・梯子乗り)	民俗芸能		厚木市古式消防保存会
相模里神楽	民俗芸能		相模里神楽垣澤社中
双盤念仏	民俗芸能		法雲寺酒井双盤講

【市指定史跡】

名称	種類	所在地	所有者
旧厚木村渡船場跡	史跡	東町	市
荻野山中藩陣屋跡	史跡	下荻野	市
烏山藩厚木役所跡	史跡	厚木町	市
本間氏累代の墓	史跡	金田	建徳寺

【県指定天然記念物】

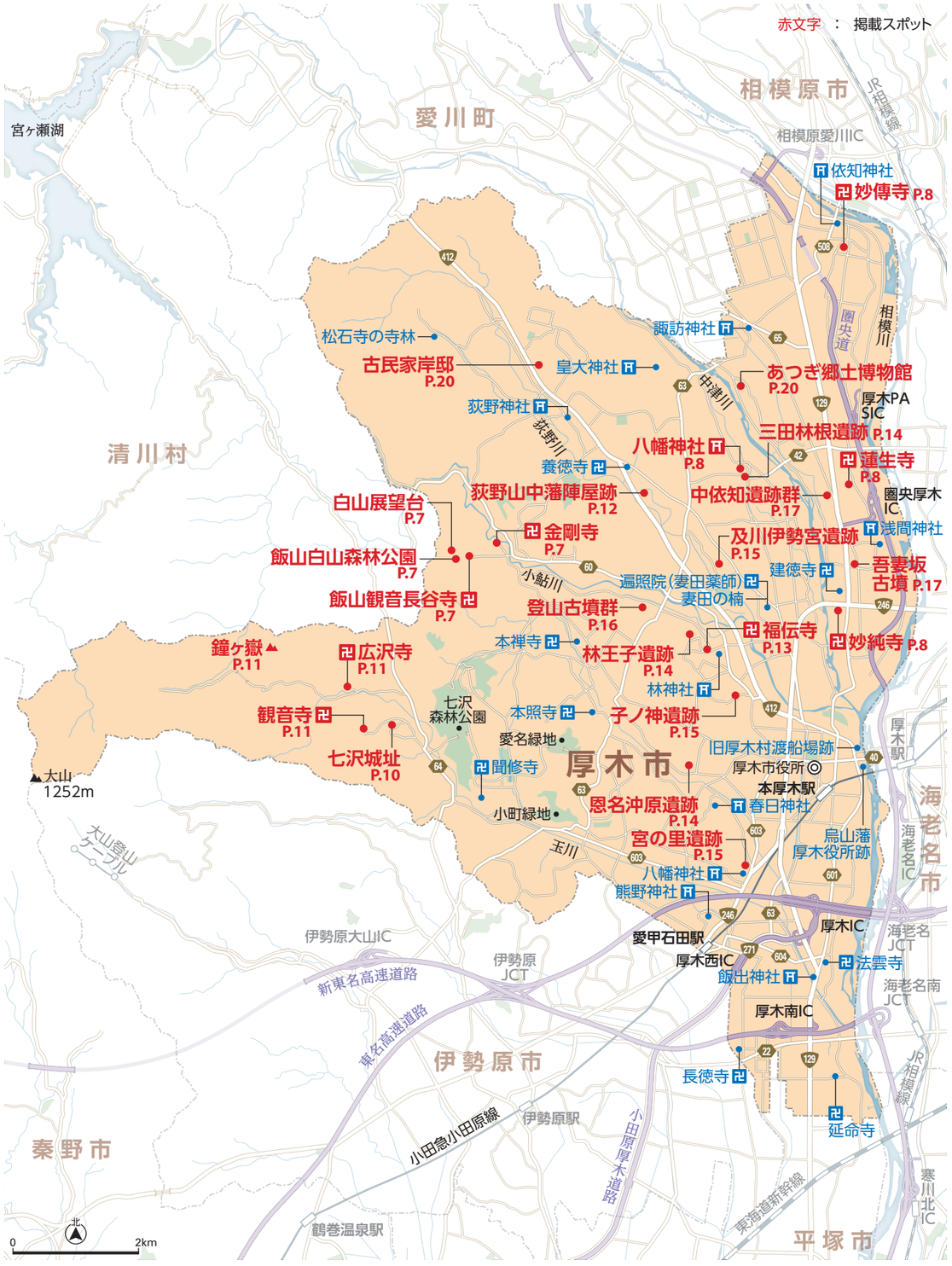
名称	種類	所在地	所有者
妻田の楠	天然記念物	妻田西	妻田薬師保存会（遍照院）
松石寺の寺林	天然記念物	上荻野	松石寺

【市指定天然記念物】

名称	種類	所在地	所有者
カシワ	天然記念物	下依知	個人
イヌマキ	天然記念物	飯山	長谷寺
イチョウ(2本)	天然記念物	上依知	依知神社
イチョウ	天然記念物	旭町	熊野神社
イチョウ	天然記念物	上荻野	荻野神社
カゴノキ	天然記念物	林	林神社
ムクロジ(無患子)	天然記念物	棚沢	皇大神社

厚木市歴史発見 MAP

本誌で紹介した歴史スポットや、厚木市内の文化財をチェックして出かけよう。



厚木人
Atsugi Jin
Powered by 歴史人
Vol.01

あつぎの歴史をもっと知るならココへ！

誌面で取り上げた土器をはじめ、厚木の郷土の歴史や文化に触れられる施設。
企画展や特別展の日程もあわせて確認して出かけよう。

古代から現代までの厚木の姿にふれる

あつぎ郷土博物館（きょうどはくぶつかん）

地元「あつぎ」の歴史や文化、自然を紹介する博物館。館内には生物・考古・民俗・歴史の４つのテーマで特集する基本展示室のほか、化石展示室や企画展示室もある。郷土の歴史・文化・自然に関連した企画展・特別展も年に数回開催するので、日程をチェックして訪問したい。

電 046-225-2515
住 厚木市下川入 1366-4
営 9:00 ～ 17:00（16:30 最終入館）
休 毎月最終月曜（祝日の場合は翌平日）
※その他年末年始や臨時休館あり
料 入館無料

自然豊かな下川入にある施設。本厚木駅北口 バス１番乗場からは、「あつぎ郷土博物館」行きに乗り、終点「あつぎ郷土博物館」下車すぐ。

あつぎ郷土博物館ホームページ

館内の基本展示室の様子。地元の考古資料も充実している。

注目の展示会

市制70周年記念展示
「寿 ―毛利家と共に―」
令和８年１月24日～３月１日

厚木市とゆかりの深い毛利家についての記念展示。正月のおめでたいときに飾る掛軸など貴重な資料も展示予定。

厚木市指定有形文化財。古民家岸邸では３月のひな人形、５月の五月人形など季節にちなんだ展示も実施。

建物や建具から近代和風建築の粋を感じられる。

伝統とモダンの調和
明治時代建造の文化遺産

古民家岸邸（こみんかきしてい）

明治 24 年（1891）建造と伝わる歴史的建物で、岸重郎平氏から厚木市に寄付されたのち一般公開されている。木造２階建ての寄棟造瓦葺で、部屋は 15 室、敷地面積は約 520 坪と広大。座敷や洋間のほか、デザイン性の高い欄間や窓、ランプシェードなども見ごたえがある。

電 046-291-0201　住 厚木市上荻野 792-2
営 ４月～９月は 10:00 ～ 17:00、
10 月～３月は 10:00 ～ 15:00
※最終入館は各 30 分前まで
休 月・火曜（祝日の場合は翌平日）　料 入館無料

発行人／園部 充　編集人／後藤隆之
2025年11月1日発行
発行所　ABCアーク　〒105-0004　東京都港区新橋6-22-6　JOYOビル4階
編集 03-6453-0636
広告 03-6453-0637

FREE無料

ABCアーク